

2014 年度博士学位論文（要旨）

渤海王国の社会と国家

— 在地社会有力者層の検討を中心に —

桜美林大学大学院 国際学研究科 環太平洋地域文化専攻
姜 成山

渤海王国の社会と国家

—在地社会有力者層の検討を中心に—

目次

序章	1
第1節 先行研究と問題の所在	1
第2節 研究の視点、方法、本論文構成.....	10
第1部 文献史料からみた渤海王国の社会と国家	
第1章 在地諸種族からみた渤海王国の時期区分.....	18
第1節 文献史料にみる渤海王国の在地諸種族.....	18
第2節 時期区分.....	27
第2章 渤海王国の前期における在地社会の有力者層.....	30
第1節 『類聚国史』の「渤海沿革記事」	30
第2節 渤海王国の「首領」に関する先行研究.....	32
第3節 『類聚国史』渤海沿革記事主要語句の分析.....	36
第4節 渤海王国の前期における首領の解釈.....	39
第3章 渤海王国の後期における在地社会の有力者層.....	49
第1節 咸和十一年渤海王国中台省牒に関する先行研究.....	49
第2節 咸和十一年渤海王国中台省牒の釈文.....	50
第3節 渤海王国の後期における在地社会の有力者の動向.....	52
第2部 考古学資料からみた渤海王国の社会と国家	
第4章 渤海王国の考古学資料.....	60
第1節 渤海王国に関連する遺跡.....	60
第2節 渤海墳墓の分析指標.....	62
第5章 六頂山墳墓群の検討.....	77
第1節 六頂山墳墓群の立地と発掘調査の経緯.....	77
第2節 六頂山墳墓群の先行研究.....	80
第3節 六頂山墳墓群の年代.....	85
第4節 墳墓構造とその分布.....	86
第5節 葬送習俗.....	91

第6節	出土遺物の検討	92
第7節	六頂山墳墓群よりみた在地社会	103
第6章	虹鱒魚場墳墓群の検討	108
第1節	墳墓の概要—立地、構造、埋葬形態—	108
第2節	出土遺物による墳墓の編年	113
第3節	他の出土遺物の検討	116
第4節	虹鱒魚場墳墓群よりみた在地社会	124
第7章	チェルニャチノ5渤海墳墓群の検討	127
第1節	史料による「率賓府」の様相	127
第2節	チェルニャチノ5渤海墳墓群の概要	128
第3節	チェルニャチノ5渤海墳墓群の年代および墳墓分布	130
第4節	遺物の埋葬様相	134
第5節	渤海率賓府の一在地社会	139
第8章	王室墓と非王室墓の特徴	145
第1節	王室墓の特徴	145
第2節	非王室墳墓の特徴	149
終章		153
第1節	結論	153
第2節	課題	156
附表・付図		158
参考文献		-1-

渤海王国の社会と国家

—在地社会有力者層の検討を中心に—

要 旨

本論文は、渤海王国の社会と国家の特質を明らかにすることを目的とする。とりわけ、在地社会にいた有力者層に焦点を当て、文献史料および考古学資料の検討を行ったうえで、渤海王国の国家的成長にともなう領土拡大の過程で、在地社会の有力者層の動向が極めて重要な役割をはたしたことを明らかにしようとした（以下では基本的に「渤海王国」という用語を使うが、文脈によって「渤海」も使う。）

渤海王国の在地社会にいた有力者層を研究対象とする本論文では、まず本論に入る前に、先行研究を「渤海王国は高句麗人または靺鞨人の国家である」という点に留意しながら、時代順に整理した（以下、研究者名の敬称は略す）。この要旨では、これまでの研究における「問題の所在」を述べたうえで、研究の視点と方法、本論文の構成の順に述べ、最後に結論とこれからの課題を述べておきたい。

問題の所在

渤海王国の研究で、研究者が主として指摘している多民族国家論、つまり渤海王権が東北アジアの諸種族を包摂して多民族国家を形成したという点ではすでに研究蓄積がある。しかし、これまでの研究は、以下の二点において問題がある。

第一点は、従来の研究における中央—周縁という構造の研究視点の問題である。これまでの研究では、無意識のうちに国民国家という枠にとらわれていたのではないだろうか。国民国家の枠のなかで渤海王国に関する史料を読み、そして渤海王権に研究の重心が置かれるようになったのではないか。そもそも、古代史研究は、国民国家という極めて近代的な概念を相対化するところから始めるべきであり、まず中央—周縁という構図の再検討が肝心であろう。これまでの渤海王国に関する研究は、渤海の王権または中央のみに焦点をあて、その支配下に入った諸種族の地域社会、つまり本論文で取り上げる在地社会を渤海王国の従属的位置でしか取り扱っていないのではないかと思われる。渤海王国の社会と国家の全体構造からみても、とりわけ在地有力者層の動向は決して無視できない。在地社会の有力者層の動向が渤海王国の社会構造と国家形成、対外関係などのさまざまな場面において深く関わっていたことは、これまでの首領制に関する研究や、渤海王国の対外交渉に関する研究でもしばしば触れられてきた。しかし、文献史料が乏しいという面もあり、あまり積極的に論じられていなかったのは、在地社会の渤海王国に対する重要な意義を積極的に認めてこなかったところにあるのではないだろうか。たとえば、河上洋の渤海地方統治に関する研究¹では、在地社会を渤海の統治対象としてのみ扱っており、渤海王国の歴史

的展開の具体的な諸場面での重要な役割には立ち入っていない。河上の提示した課題には「渤海の国家成立とその維持のメカニズムに関する研究はまだ充分とは言えず」とある。渤海王国の維持のメカニズムを明らかにする過程において、在地社会の重要性に関心を注ぎ、在地社会側から渤海王国を眺望する試みが必要ではないかと思われる。すなわち、在地社会から渤海王国の歴史を再構成した研究は、いまだ充分とはいえない。

第二点は、文献史料の少ない渤海王国の研究において、考古学資料の検討が不可欠だということである。これまで渤海王国に関する考古学発掘調査は多く行われてきた。しかし、渤海王国の研究においては、文献史学の研究に考古学研究の成果を取り込む試み、あるいは考古学資料の研究で文献史学の成果を取り込む試みがなされた研究が全くなかったとは言えないが²、文献史料と考古学資料の両者に対して積極的に目配りした研究は充分とはいえない。文献史料と考古学資料の示す事象が異なるため、それぞれの領域の研究者が研究を進める上で躊躇することもあるが、文献史料が少ないからこそ、文献と考古の両方の成果を積極的に重ね合わせ、研究を試みる必要があるのではないだろうか。

このような先行研究の二つの問題点、すなわち王権中心の史観による研究傾向と、文献史学と考古学の両方からの研究成果を駆使しての研究の不充分さを批判して、本論文では、渤海王国に存在していた在地社会の有力者層の動向に焦点を当てる。また、文献史料と考古学資料の両方を考察し、渤海王国の社会と国家の議論を進めた。

研究の視点

前述したように、本論文の課題は、在地有力者層の動向から渤海王国の実態を解明することにある。そのためには、在地社会を渤海王国の従属的な存在としかとらえてこなかった従来の地方統治体制に関する一連の研究から視点を変え、まず、在地社会の諸勢力を渤海王国と対等的な存在であったとの仮説から論を進めてみた。

まず、本論文で取り上げる渤海王国の「在地社会」という歴史的概念を、『旧唐書』、『五代史要』、『新唐書』に基づいて簡単に説明する。

上記の文献によれば、高句麗は 668 年に唐によって滅ぼされる。その後、高句麗の領域には安東都護府が設置され、唐王朝に協力した高句麗領域内の部落長は、唐より都督、刺史、県令などの官職を授けられた。一方、高句麗領域内で唐に離反していた人々は、唐王朝によって営州をはじめとする唐の領域内に強制移住させられた。

696 年、営州の契丹人が反乱を起こした。この反乱を契機に、営州に強制移住させられた大祚栄という人物が高句麗人と靺鞨人を連合して、営州の東方にある旧高句麗の領域に逃れる。やがて、大祚栄は東牟山という地にたどりついて建国をはたす。

渤海王国の建国過程について注目したいのは、『旧唐書』渤海靺鞨伝などの史籍が伝えるように、建国の直後、渤海王国の前身である振国は「方二千里」という領域であったという点である。このような広い領域の支配は、営州から逃亡してきた大祚栄一行にとって、旧高句麗領の諸地域に残留していた部落の都督、刺史と呼ばれる部落長またはその地域の

有力者層の支持を得なければ、成り立たなかったと推測される。

渤海王国は建国をはたした後も、領土の拡大を推進し、100年以上たった9世紀ごろには、唐王朝より「海東の盛国」と呼ばれるようになる。そのときの領域は、『新唐書』渤海伝には「地方五千里」と記されている。建国当初の「方二千里」から100年後の「方五千里」と領域が広がった主な原因は、王国の北方に居住していた靺鞨諸部族を支配下に置いたことによる。この「方五千里」への領域拡大の過程も、やはり靺鞨諸部族の部落長または有力者層を懐柔しなければ、成し遂げられなかったと考えられる。

このような渤海王国の建国と領土の拡大過程においては、それぞれの地域に根付いていた部落長を含むその地の有力者層との関係が注目される。渤海王国が征服の対象とした地域は、やがて王国の行政区画に編入されるようになる。しかし、渤海王国による征服とは無関係に、各地域社会が自主的に、それぞれ、古代東アジア諸国と交渉をもったことは文献史料で確認できる。したがって、これらの地域を総称して渤海王国の行政区画下の地方社会と呼称するのは妥当ではない。そこで、本論文では、渤海王国の領土的な発展過程のなかで、王国の影響を受けながらも、東アジア地域でそれぞれ、自主的に活動していた諸地域社会を「在地社会」と定義したい。そして、在地社会のなかで、渤海王国や古代東アジア世界で諸般の交渉にあたったのは、在地の有力者層であったと考えられる。

在地社会の種族構成は、高句麗人、靺鞨人の外に、漢人、契丹人などが想定される。しかし、本論文では、渤海王国の社会と国家に重要な役割を果たした高句麗人と靺鞨人の在地社会を中心に扱った。高句麗人と靺鞨人の在地社会の有力者層に焦点をあてることにより、渤海王国の領土拡大過程や前近代の国家的位相を浮き彫りにした。

研究の方法

渤海王国に関して現在確認できる記録は、10世紀中葉に成立した『旧唐書』渤海靺鞨伝、11世紀中葉に成立した『新唐書』渤海伝があり、ほかの記録より比較的詳細である。ほかにも『冊府元龜』、『唐会要』、『五代会要』、新旧『五代史』、『資治通鑑』などに記録されている。しかし、これらの史料はおおむね『旧唐書』と『新唐書』の記事を継承したものが多し。また、日本の『続日本紀』以下の六国史と『類聚国史』には渤海使節団の来日記事があり、高麗時代に編纂された『三国史記』の「新羅本紀」には同時代の新羅北辺にあった渤海王国に関して記したものが若干あり、『三国遺事』にも「渤海」について説明している部分がある。

つまり、渤海王国の研究に際して、王国自ら残した歴史記録はいまのところ存在しないため、中国や日本、朝鮮半島に残存している数少ない文献史料から紐解くしかない。

したがって、文献史料に対する史料批判を徹底的に行う必要がある。この点について、1970年代以降から現在にいたる日本の渤海史研究には多くの研究蓄積があり、本論文ではその研究成果を積極的に取り入れ、批判的に継承するところから出発した。

一方、文献史料の情報量が少ないという限界のなかでは、考古学の発掘調査と関連の研

究が必要であることは容易に想像される。しかし、考古学資料と文献史料を安易に結びつけて論じることには危険がともなう。文献史料が伝える情報と考古学資料があらわす様相とは必ずしも時代的に一致しない場合が多いからである。

文献史学では、たとえば渤海王国の建国時の状況を、一年、二年の刻みで考察することが可能である。一方、考古学資料では、紀年がある碑石などの文字資料が出土しないかぎり、年代の考察はほとんど器物や遺構の考古学的知見に基づく編年作業に頼らざるをえない。したがって、考古学で取り扱う時間の幅は半世紀以上の長期間になりがちであり、建国のような比較的短い時間幅で考察する問題は扱いにくくなる。時に、両学問分野で相容れない見解が導き出されることもありうるので、注意する必要がある。

そうした懸念もあり、これまでの多くの先行研究は、文献史料もしくは考古学資料の一方を活用した研究が多いと思われる。在地社会の様相や社会的構造を、より立ち入って明らかにするためには、文献史料と考古学資料の両面から考察する必要があると筆者は考える。

本論文では、文献史学と考古学という異なった史資料から在地社会を明らかにするため、在地社会に注目して渤海王国の歴史を時期区分して検討を進める。その時期区分は、まず文献史料に基づいて行う。そして、考古学資料の時間的性質も考慮し、渤海王国がもっとも強力であった黒水靺鞨の在地社会を統合した時点を境として大きく前期と後期に分けた。

文献史学で得られる知見は、文献史学の議論の手順にそって研究すべきである。また、考古学資料の研究で得られた見解は、考古学の手法で研究すべきである。先行研究で、それぞれに成果が見られる。そこで、両学問分野の成果をとり入れようとする本論文では、まず文献史学の面から前期と後期における在地社会の有力者層の実態と動向を検討する。ついで、考古学資料からそれぞれの時期における在地社会の有力者層の状況を推論してみた。考古学資料としては、六頂山墳墓群、虹鱒魚場墳墓群、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群に限定して、在地社会の様相を検討する。この三墳墓群は、それぞれ悉皆調査がほぼ終わり、考古学報告書が刊行されているので、資料的確実さも確保されている。さらに、これらの三墳墓群に限定したのは、これらの三墳墓群が、本論文の第1章で試みた渤海王国と在地諸種族との関係による時期区分と対応しているからである。すなわち、六頂山墳墓群は前期の在地社会と渤海王権の関係をうかがう墳墓群であり、虹鱒魚場墳墓群は後期の在地社会と渤海王国の関係をうかがう墳墓群であり、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群は渤海建国の前から渤海全盛期までの在地社会の様相をうかがえる墳墓群であるといえる。

いうまでもなく、考古学資料の場合、遺跡や出土遺物の時代を文献史料に即して比定することは難しい。しかしながら、本論文で論じている在地社会の変容は、在地諸種族が渤海王国への統合とそこからの離脱といった事象のなかに認められ、在地社会の有力者層をより具体的に把握するためには、渤海王国と在地諸種族との関係から時期区分をして検討する必要がある。本論文では、文献史料と考古学資料の両方を、在地社会の有力者層に焦点をあてて、前期と後期に時期区分して論を進めた。

本論文の構成

本論文は二部構成である。第1部では文献史料を用いて検討し、第2部では考古学資料を用いて検討した。

まず、序章においては、渤海王国と在地社会に関する研究史を整理し、これまでの研究における問題の所在、本論文の研究視点と研究方法、論文の構成を明確にした。

第1部「文献史料からみた渤海王国の社会と国家」では、文献史料を活用して渤海王国と在地社会及び在地社会の有力者層との関係を検討した。

第1章「在地諸種族からみた渤海王国の時期区分」では、文献史料を手がかりに渤海王国と在地社会の諸種族との関係について時期区分をして、その概要を示した。渤海王国は、前期つまり建国初期における東北アジア諸種族の代表的地位を得て、次第に領域を拡大して行く。この過程で在地社会における最大の勢力である黒水靺鞨への対応から、前期と後期に時期区分をした。このうち前期では、おもに高句麗や南部靺鞨の統合、北部靺鞨の一部統合で、さらに三つの段階に分けられる。後期は、黒水靺鞨の統合と離脱によってさらに三つの段階に分けられることを明らかにした。

第2章「渤海前期における在地社会の有力者層」では、第1章で行った時期区分に基づいて、渤海王国の前期を対象に、『類聚国史』渤海沿革記事を検討し、在地社会の「首領」の存在を議論した。少し詳しく言えば、「首領」の解釈に関連すると思われる「百姓」や「土人」を検討するため、中国正史から用例を集めた。その検討の結果、『隋書』の用語が「渤海沿革記事」に多く参照されていたという石井正敏の見解³を再確認した。そのうえで、「百姓」、「土人」の用語を解釈し、当該記事のなかの渤海の「首領」は、靺鞨各部の下に位置付けられる落に存在した有姓者の「靺鞨人」と「土人」であると考えた。一方、都督の職に任じられたのは、靺鞨部落のうちで大村の村長（「土人」の酋長）で、刺史はそれに次ぐ規模の村里の村長（「土人」の酋長）であると考えられる。これら官職は、渤海王国によって認められたものであり、前期の渤海王国は、こうした都督・刺史・首領に任命された在地社会の有力者層によるそれぞれの部落民への支配秩序を温存したまま地方支配を進めていったと推測した。

第3章「渤海王国の後期における在地社会の有力者層」では、渤海王国後期の在地有力者層、とりわけ首領層の動向がうかがえる「咸和十一年渤海王国中台省牒」を取り上げて、在地社会の様相を探ってみた。その結果、渤海王国の後期には、在地社会が、一旦、完全に王国に統合されていたことが明らかになった。後期の第三段階の在地社会については、首領層の活動を示す確実な史料は見当たらないが、『遼史』や『三国史記』、『高麗史』などに散在する記事を用いて、渤海王国が衰退期を迎えるにつれ、在地社会では、独自の活動が頻繁に再開されたことが確認できた。

第2部「考古学資料からみた渤海王国の社会と国家」では、渤海王国の在地社会と在地社会の有力者層の様相を考古学資料から考察した。

第4章「渤海王国の考古学資料」では、渤海王国に関連する考古学資料の概要を述べた。そのなかで当時の社会の様相をもっとも確実に表すのは墳墓群資料であると考え、墳墓群を分析する指標である墳墓形態、埋葬習俗、副葬品について説明をくわえた。

第5章「六頂山墳墓群の検討」では、渤海王国の初興の地である六頂山墳墓群の詳細な検討を通じて、火焼された土坑墓、靺鞨罐をはじめとする靺鞨社会の様相と石室墓、陶質土器などで代表される高句麗社会の様相、それらが融合して現れた壙室墓（T形、L形、長方形石室墓）の営まれた在地社会を浮き彫りにした。とくに各墳墓を分析する指標を整理した結果、在地有力者層の墳墓の存在を推定するとともに、渤海王国後期の墓制（墳墓形式や副葬品など）に重要な影響を及ぼした可能性を指摘した。

第6章「虹鱒魚場墳墓群の検討」では、渤海後期に比定される虹鱒魚場墳墓群を検討した。当該墳墓群にはほとんどが壙室墓（T形、L形、長方形石室墓）であり、土坑墓は見えず、火焼墓が少なく、靺鞨罐が多く出土した。さらに、これらを複眼的に検討したのちに、虹鱒魚場墳墓群からも在地有力者層が存在していたことを明らかにすることができた。

第7章「チェルニャチノ 5 渤海墳墓群の検討」では、文献史料でほとんど伺えない渤海王国の率賓府にある在地社会について、主としてチェルニャチノ 5 渤海墳墓群の検討を行った。この墳墓群は、6～7世紀、8世紀、9世紀などの三段階に分けられ、六頂山墳墓群で見られた土坑墓、壙室墓などが見られることから、王国の辺境に位置する在地社会でも渤海王国の墓制を取り入れていた過程を解明した。そのうえで、各部（北西部、境界部、南東部）の墳墓群の中間に位置する墳墓が、6～9世紀の各段階における在地有力者層の墳墓であると推論した。

第8章「王室墓と非王室墓の特徴」では、王室墓と非王室墓を墳墓形式、副葬品などを取り上げて比較し、在地社会の有力者層の存在形態を浮き彫りにした。

終章においては、以上の各章における検討をふまえて、在地社会の有力者層からみた渤海王国の位相を明確化し、在地社会の歴史的意味を探った。最後に本論文の課題とこれからの研究の展望を述べた。

結論

本論文は、渤海王国の歴史を在地社会の有力者層の観点から再構成しようと試みたものである。

文献史料と考古学資料の両方を取り上げ、渤海王国の在地社会について研究した結果、まず、文献史料からは、在地社会に存在する「首領」層が渤海王国の統合下に入ったが、黒水靺鞨のような靺鞨の一部は、最後まで独自性を維持していたことがわかった。次に、考古学資料の墳墓群資料の検討を通じては、はじめは独立的な文化要素を持っていた在地社会の墓制は、渤海王国の発展に伴って融合がはじまるが、王室墓とは峻別されていたことがわかった。

こうして文献史料、考古学資料の両方から、在地社会の有力者層の様相をある程度確認

することができた。在地社会の有力者層について、その渤海王国の社会と国家における位置と動向は、具体的に次のように結論づけられる。

渤海王国の前期においては、在地の有力者層は渤海建国以前からの在地社会に対する支配権を維持し、渤海政権と拮抗できる地位にあった。それは『冊府元龜』などの対唐外交記事、『続日本紀』に記載されている対日外交記事からうかがうことができる。律令体制などを導入し、渤海王国が国家的成長を遂げていくにつれて、各地に散在する在地社会における有力者層は、王国によって国家に編入されていった。そうした渤海王国の前期は、地理的にも最も遠くに位置した黒水靺鞨を支配下に編入するにいたるまでである。

しかしながら、その国家的な編入の実態は、在地社会に対する完全な支配ではなく、在地社会の有力者層を王国につなぎとめて間接的に支配する羈縻支配体制であったと推定される。それは、王国の後期において、王権内部に内紛がおこると在地社会そのものが王国から離脱する傾向を示すことから伺うことができる。また、「海東の盛国」と称された時期においては、在地社会の独自の活動を確認することはできないが、滅亡する十数年前から在地社会が独自の活動を再開していることから確認できる。

渤海政権の在地社会への支配は、文化的融合をとまなうものであったと思われる。その証拠として、墳墓群資料にみられる墳墓の形態と副葬品の変遷があげられる。たとえば、前期に属する六頂山墳墓群には渤海以前の在地社会の有力者層の墳墓が存在し、そこには王室の墳墓が造営されるが、両者は、墳墓形態（土壙墓と石室墓）や靺鞨罐の埋納の有無において著しく異なる。しかしながら、後期の虹鱒魚場墳墓群では、墳墓形態は壙室墓が主流となり、靺鞨罐がほとんどの墳墓で発掘される。一方、辺境地域に目を向けると、土壙墓から石室墓への変遷過程が確認できた。さらに、王室墓と非王室墳墓を比較すると、王室墓は石室墓であり、靺鞨罐を基本的に副葬しないが、非王室墳墓ではその逆であると思われる。このような現象は、渤海王国が在地社会の有力者層を支配する際に、文化的な内容を即座に変更させたのではなく、在地社会の文化的独自性を容認した結果であり、政治的に行った羈縻支配の結果ではなかったかと推測する。こうした在地社会の独自性こそ、渤海王国 229 年間の歴史的変遷をささえた要因の一つであると思われる。

課題

以上、本研究で得られた結論をまとめてみた。在地社会とその有力者層に着目し、渤海王国の社会と国家を解明しようと試みた。しかしながら、文献史料、考古学資料両方面からの研究には、次のようないくつかの課題が残されている。

第一に、文献史料の研究では、在地社会の視点から渤海の歴史の時期区分を試みたことによって「首領」や有姓者の存在及び動向に関する研究をある程度深化させることができたと思われる。しかしながら、その具体的な動向については、史料上の制約によって徹底的な分析が行き届かず、くわえて、同時代の東アジア世界の状況にほとんど触れられなか

った。とりわけ、渤海王国の在地社会と遊牧世界との関係は、まったく取り上げることができなかつた。考古学資料の墳墓を整理する過程で、火葬といった埋葬様式やチュルク型帯飾板などは、遊牧世界の要素を呈していることが判明したにもかかわらず、本研究では、この点についてまったく取り上げられなかつた。また、渤海王国時代の文献史料の検討が中心となり、遼、金代の渤海人に関する文献史料にほとんど触れられなかつたため、考古学資料に対応する文献史料の時間幅は非常に狭くなっている。さらに、渤海王国時代においても、遷都、五京制度も在地社会と少なからず関係していたと思われる。けれども、本研究では在地社会と遷都および五京制度の設置背景との関連の追求はできておらず、今後の課題として残されている。

第二に、考古学資料の研究では、刊行されている報告書に基づき墳墓群を中心に検討した。それは遺跡・遺物を調査した考古学資料に基づいて、当該地域の在地社会の様相を探ろうとした試みであった。墳墓の研究では、これから公開される資料にもとづく墳墓群の検討、さらに比較作業、その上に得られるそれぞれ地域の在地社会の様相についての検討を深化させる必要がある。また、集落、都城の遺跡については、墳墓群資料との対照作業を進めつつ、渤海王国の在地社会と有力者層の状況を解明する必要がある。

第三に、文献史料と考古学資料の比較研究では、考古学資料を扱う際に文献史料の成果を取り入れようとした。しかしながら、葬送習俗の検討は不十分で、とくに、在地有力者層の実態について文献史料と考古学資料の両方からの検討はいまだ充分ではない。渤海王国に存在した在地社会がどのように変化したか、またその在地社会を変化させる要因として、有力者層だけでなく、たとえば庶民層などは、どのような存在であり、彼らは渤海王国の行方にどのように影響され、またどのように影響したかという問題は大きな課題として残っている。

本論文は、1300年前の渤海王国に生活していた多くの人々が、日々どのように暮らし、自ら属していた社会と国家にどのように関わっていたかを解明するにあたっての基礎的な作業にほかならない。

注

- 1 河上洋「渤海の地方統治体制—一つの試論として—」（『東洋史研究』42(2)、1983年、pp.1~25）。
- 2 酒寄雅志の『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001年）は文献史料の分析に中心をおき、考古学資料も援用している。白杵勲の『鉄器時代の東北アジア』（同成社、2004年）は渤海も含めて、前後の時代の考古学資料を主に扱っていて、文献史料による社会状況などの確認も行っている。このように、これまで多くの研究者は文献と考古両方を念頭におきながら渤海の社会と国家に関する諸問題を議論しているが、一方に偏りがちである。
- 3 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、pp.109~110、初出1996年）。

参考文献

[著書]

【中国語著書】（筆画順）

1. A.И.奥克拉德尼科夫著、莫潤先・田大畏訳『浜海遙遠の過去』（商務印書館、1982年）。
2. У.В.沙弗庫諾夫など著、宋玉彬訳『渤海国及其俄羅斯遠東部落』（東北師範大学出版社、1997年）。
3. 王小甫『盛唐時代与東北亜政局』（上海辞書出版社、2003年）。
4. 王承礼『渤海簡史』（黒龍江人民出版社、1984年）。
5. 王承礼など『渤海国志三種』（天津古籍出版社1992年）。
6. 王承礼『中国東北の渤海国与東北亜』（吉林文史出版社、2000年）。
7. 王禹浪、魏国忠『渤海史新考』（哈爾濱出版社、2008年）。
8. 中国社会科学院考古研究所『六頂山与渤海鎮:唐代渤海国の貴族墓地与都城遺址』（中国大百科全書出版社、1997年）。
9. 方学鳳『渤海主要遺跡考察散記』（延边大学出版社、2003年）。
10. 尹鉉哲『渤海国交通運輸史研究』（華齡出版社、2006年）。
11. 吉林省文物志編委会『敦化市文物志』（吉林省文物志編集委員会、1985年）。
12. 吉林省文物志編委会『和龍県文物志』（吉林省文物志編集委員会、1984年）。
13. 吉林省文物考古研究所『榆樹老河深』（文物出版社、1987年）。
14. 吉林省文物考古研究所など『西古城:2000~2005年度渤海国中京顕徳府故址田野考古報告』（文物出版社、2007年）。
15. 吉林省文物考古研究所『田野考古集粹』（文物出版社、2008年）。
16. 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所『六頂山渤海墓葬—2004~2009年清理發掘報告』（文物出版社、2012年）。
17. 朱国忱・朱威『渤海遺跡』（文物出版社、2002年）。
18. 朱国忱・魏国忠『渤海史稿』（黒龍江省文物出版編集室、1984年）。
19. 朱国忱・魏国忠・郝慶云『渤海国史』（中国社会科学出版社、2006年）。
20. 李陳奇・趙鉄夫『海曲華風』（文物出版社、2010年）。
21. 李徳山『隋唐時期東北边疆民族与中央王朝關係史研究』（香港亜州出版社、2008年）。
22. 李殿福・孫玉良『渤海国』（文物出版社、1987年）。
23. 李宗侗『中国史学史』（中国友誼出版公司、1984年）。
24. 宋玉彬・A.И.伊夫里耶夫・E.И.格尔曼『俄羅斯滨海边疆区渤海文物集粹』（文物出版社、2013年）。
25. 林攀『失落的渤海古国』（華齡出版社、2010年）。
26. 国家文物局『中国文物地図集：吉林分冊』（広東省地図出版社、1989年）。
27. 金毓黻『渤海国志長編』（千華山館、1934年）。
28. 延边博物館『延边文物簡編』（延边人民出版社、1988）。
29. 禹碩基など『渤海国与東亜細亜』（遼寧大学出版社、1995年）。
30. 馬一虹『靺鞨、渤海与周辺国家、部族關係史研究』（中国社会科学出版社、2011年）。
31. 孫玉良『渤海史料全編』（吉林文史出版社、1992年）。

32. 孫進己・孫海編集『高句麗渤海研究集成（1～6）』（哈爾濱出版社、1997年）。
33. 黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系『河口与振興』（科学出版社、2001年）。
34. 黒龍江省文物考古研究所『渤海上京城:1998～2007年度考古発掘調査報告』（文物出版社、2009年）。
35. 黒龍江省文物考古研究所『寧安虹鱒魚場:1992～1995年度渤海墓地考古発掘報告』（文物出版社、2009年）。
36. 黒龍江省文物考古研究所『考古・黒龍江』（文物出版社、2011年）。
37. 張碧波・張軍『渤海国外交史研究』（黒龍江人民出版社、2011年）。
38. 程妮娜『東北史』（吉林大学出版社、2001年）。
39. 曾憲麗『渤海歴史研究論文索引』（吉林文史出版社、2010年）。
40. 馮恩学『俄国東西伯利亚与遠東考古』（吉林大学出版社、2002年）。
41. 楊志軍『東北亜考古資料訳文集：渤海專号』（北方文物雜誌社、1998年）。
42. 楊雨舒・蔣戎『唐代渤海国五京研究』（香港亜州出版社、2008年）。
43. 楊保隆『渤海史入門』（青海人民出版社、1988年）。
44. 楊軍『渤海国民族構成与分布研究』（吉林人民出版社、2007年）。
45. 鄭永振・嚴長録『渤海墓葬研究』（吉林人民出版社、2000年）。
46. 鄭永振『渤海史研究（11）』（延辺大学出版社、2002年）。
47. 鄭永振『高句麗渤海靺鞨墓葬比較研究』（延辺大学出版社、2003年）。
48. 鄭永振・李東輝・尹鉉哲『渤海史論』（吉林文史出版社、2011年）。
49. 劉曉東『渤海文化研究』（黒龍江人民出版社、2006年）。
50. 滕紅岩『渤海史文献史料簡篇』（吉林文史出版社、2006年）。
51. 魏存成『渤海考古』（文物出版社、2008年）。
52. 譚英傑など『黒龍江区域考古学』（中国社会科学出版社、1991年）。

【日本語著書】（五十音順）

1. A・P・オクラードニコフ著、加藤九祚・加藤晋平訳『シベリアの古代文化—アジア文化の源流—』（講談社、1974年）。
2. E.H.カー著、清水幾太郎訳『歴史とは何か』（岩波書店、1962年）。
3. 赤羽目匡由『渤海王国の政治と社会』（吉川弘文館、2011年）。
4. ア・ペ・オクラドニコフ他著、荻原眞子・中島寿雄・中村嘉男訳『シベリア極東の考古学』（河出書房新社、1982年）。
5. 天野哲也など『中世東アジアの周縁世界』（同成社、2009年）。
6. 天野哲也など『北方世界の交流と変容:中世の北東アジアと日本列島』（山川出版社、2006年）。
7. 池内宏『満鮮史研究（中世 第1冊）』（荻原星文館、1943年）。
8. 池内宏『満鮮史研究（中世 第2冊）』（座右宝刊行会、1937年）。
9. 石井正敏『日本渤海関係史の研究』（吉川弘文館、2001年）。
10. 石母田正『日本の古代国家』（岩波書店、1971年）。
11. 一瀬和夫、福永伸哉、北條芳隆編『墳墓構造と葬送祭祀』（同成社、2011年）。
12. 井上秀雄他訳注『東アジア民族史 2—正史東夷伝（東洋文庫 283）』（平凡社、1976年）。
13. 上田雄、孫栄健『日本渤海交渉史』（六興出版、1990年）。

14. 上田雄『渤海使の研究—日本海を渡った使節たちの軌跡—』(明石書店、2002年)。
15. 上田雄『渤海国—東アジア古代王国の使者たち—』(講談社、2004年)。
16. 上田正昭監修『古代日本と渤海:能登からみた東アジア:TOGI 渤海シンポジウム』(大巧社、2005年)。
17. 臼杵勲『鉄器時代の東北アジア』(同成社、2004年)。
18. 大貫静夫『東北アジアの考古学』(同成社、1998年)。
19. 金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』(名著刊行会、2001年)。
20. 菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』(北海道大学図書刊行会、1995年)。
21. 菊池俊彦『北東アジアの歴史と文化』(北海道大学出版会、2010年)。
22. 吉林省博物館『吉林省博物館』(講談社、1988年)。
23. 児玉幸多『平安時代(上)(図説日本文化史大系)』(小学館、1958年)。
24. 駒井和愛『中国都城・渤海研究』(雄山閣出版、1977年)。
25. 斎藤優『半拉城と他の史蹟』(半拉城址刊行会、1978年)。
26. 在日本朝鮮社会科学者協会歴史部会編『高句麗・渤海と古代日本』(雄山閣、1993年)。
27. 酒寄雅志『渤海と古代の日本』(校倉書房、2001年)。
28. 佐藤信『日本と渤海の古代史』(山川出版社、2003年)。
29. 白鳥庫吉『塞外民族史研究.下(白鳥庫吉全集:第5巻)』(岩波書店、1970年)。
30. シャルロット・フォン・ヴェアシュア著、河内春人訳『モノが語る日本対外交易史(七〜一六世紀)』(藤原書店、2011年)。
31. 朱栄憲著・在日本朝鮮人科学者協会歴史部会訳『渤海文化』(雄山閣、1979年)。
32. 朱国忱・魏国忠著、浜田耕策訳『渤海史』(東方書店、1996年)。
33. 鈴木靖民『古代対外関係史の研究』(吉川弘文館、1985年)。
34. 鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、1996年)。
35. 鈴木靖民『古代日本の異文化交流』(勉誠出版、2008年)。
36. 鈴木靖民『日本の古代国家形成と東アジア』(吉川弘文館、2011年)
37. 鈴木靖民編『日本古代の王権と東アジア』(吉川弘文館、2012年)
38. 鈴木靖民など編『訳注日本古代史の外交文書』(八木書店、2013年)。
39. 田村晃一『東アジアの都城と渤海』(東洋文庫、2005年)。
40. 田村晃一『渤海都城の考古学的研究(II)』(東洋文庫、2007年)。
41. 田村晃一『クラスキノ(ロシア・クラスキノ村における一古城址の発掘調査)』(渤海文化研究中心、2011年)。
42. 津田左右吉『満鮮歴史地理研究1~2(津田左右吉全集 第11~12巻)』(岩波書店、1964年)。
43. 鄭永振著・成澤勝編『古ツングース諸族墳墓の比較研究』(東北大学東北アジア研究センター、2003年)。
44. 鳥山喜一『満州国古蹟古物調査報告書(三) 間島省の古蹟』(満州国国務院文教部編、1942年)。
45. 鳥山喜一『渤海史考』(目黒書店、1915年)。
46. 鳥山喜一『失われた王国—渤海国小史』(翰林出版、1949年)。
47. 鳥山喜一『渤海史上の諸問題』(風間書房、1968年)。
48. 東亜考古学会『東京城 渤海国上京龍泉府址の発掘調査』(東亜考古学会、1939年)。

49. 東京帝国大学文学部編『満鮮地理歴史研究報告（第1～11）』（東京帝国大学文学部、1926年）。
50. 東京帝国大学文学部編『満鮮地理歴史研究報告（第16）』（東京帝国大学文学部、1941年）。
51. 東北亜歴史財団編、濱田耕策監訳『渤海の歴史と文化』（明石書店、2009年）。
52. 中澤寛将『北東アジア中世考古学の研究:靺鞨・渤海・女真』（六一書房、2012年）。
53. 西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』（東京大学出版会、1983年）。
54. 新妻利久『渤海国史及び日本との国交史の研究』（東京電気大学出版局、1969年）。
55. 新野直吉『古代東北と渤海使』（歴史春秋、2003年）。
56. 沼田頼輔『日滿の古代国交』（明治書院、1933年）。
57. 野村崇・宇田川洋『続縄文・オホーツク文化』（北海道新聞社、2003年）。
58. 浜田久美子『日本古代の外交儀礼と渤海』（同成社、2011年）。
59. 濱田耕策『渤海国興亡史』（吉川弘文館、2000年）。
60. 日野開三郎『東北アジア民族史（日野開三郎東洋史学論集第14巻）』（三一書房、1988年）。
61. 日野開三郎『東北アジア民族史（日野開三郎東洋史学論集第15巻）』（三一書房、1991年）。
62. 日野開三郎『東北アジア民族史（日野開三郎東洋史学論集第16巻）』（三一書房、1990年）。
63. 廣瀬憲雄『東アジアの国際秩序と古代日本』（吉川弘文館、2011年）。
64. 藤井一二『天平の渤海交流:もうひとつの遣唐使』（塙書房、2010年）。
65. 古畑徹『王溥『唐会要』復元のための基礎的研究』（平成9年度～平成11年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2000年）。
66. 堀敏一『中国と古代東アジア世界—中華的世界と諸民族—』（岩波書店、1993年）。
67. 堀敏一『東アジアのなかの古代日本』（研文出版、1998年）。
68. 三上次男『高句麗と渤海』（吉川弘文館、1990年）。
69. 蓑島栄紀『古代国家と北方社会』（吉川弘文館、2001年）。
70. 水野清一など『北滿風土雜記』（座右室刊行会、1938年）。
71. 矢島玄亮『日本国見在書目録:集証と研究』（汲古書院、1984年）。
72. 箭内互など著『満洲歴史地理（第1～2巻）』（南満洲鉄道、1913年）。
73. 湯沢質幸『古代日本人と外国語:源氏・道真・円仁・通訳・渤海・大学寮』（勉誠出版、2001年）。
74. 吉井秀夫『朝鮮三国時代の墳墓における棺・槨・室構造の特質とその変遷』（平成18年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、京都大学大学院文学研究科、2010年）。
75. 吉井秀夫『古代朝鮮墳墓に見る国家形成』（京都大学学術出版会、2010年）。
76. 李成市『東アジアの王権と交易—正倉院の宝物が来たもうひとつの道—』（青木書店、1997年）。
77. 李成市『古代東アジアの民族と国家』（岩波書店、1998年）。
78. 李殿福著、西川宏訳『高句麗・渤海の考古と歴史』（学生社、1991年）。
79. 渡辺信一郎『中国古代の王権と天下秩序—日中比較史の視点から—』（校倉書房、2003年）。

【韓国語著書】(ハングル音順、日本語は筆者訳。)

1. 고구려연구재단, 러시아 극동 역사고고 민속학 연구소동북아역사재단 『러시아 연해주 크라스키노성 발굴 보고서』 (고구려연구재단, 2004년) .
高句麗研究財団、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所 『ロシア沿海州クラスキノ渤海寺院址発掘報告書』 (高句麗研究財団、2004年)。
2. 고구려연구재단 『발해사 자료집』 (고구려연구재단, 2004년) .
高句麗研究財団 『渤海史資料集』 (高句麗研究財団、2004年)。
3. 김경태 『考古學의 理論과 方法論: 考古學의 主要 概念들』 (주류성출판사, 2006년) .
金敬泰 『考古学の理論と方法論: 考古学の主要概念』 (周留城出版社、2006年)。
4. 김종혁 『동해안 일대의 발해 유적에 대한 연구』 (중심, 2002년) .
金宗赫 『東海岸一帶渤海遺跡に関する研究』 (中心、2002年)。
5. 김종복 『발해정치외교사』 (일지사, 2009년) .
金鐘福 『渤海政治外交史』 (一志社、2009年)。
6. 동북아역사재단 『발해사연구논저목록』 (동북아역사재단, 2005년) .
東北亜歴史財団 『渤海史研究論著 目録』 (東北亜歴史財団、2005年)。
7. 동북아역사재단 『새롭게 본 발해사』 (동북아역사재단, 2007년) .
東北亜歴史財団 『新たにみる渤海史』 (東北亜歴史財団、2007年)。
8. 동북아역사재단 『발해의 역사와 문화』 (동북아역사재단, 2007년) .
東北亜歴史財団 『渤海の歴史と文化』 (東北亜歴史財団、2007年)。
9. 동북아역사재단, 러시아 극동 역사고고 민속학 연구소 『2007 러시아 연해주 크라스키노 발해성 발굴 보고서』 (동북아역사재단, 2008년) .
東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所 『2007 ロシア沿海州クラスキノ渤海城発掘報告書』 (東北亜歴史財団、2008年)。
10. 동북아역사재단; 러시아과학원 극동분소 역사고고민속학연구소 『연해주 크라스키노 발해성 (2008년도) 한·러 공동 발굴보고서』 (동북아역사재단, 2010년) .
東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所 『沿海州クラスキノ渤海城 (2008年度) 韓・ロ共同発掘報告書』 (東北亜歴史財団、2010年)。
11. 동북아역사재단; 러시아과학원 극동분소 역사고고민속학연구소 『연해주 크라스키노 발해성 (2009년도 1~2) 한·러 공동 발굴보고서』 (동북아역사재단, 2011년) .
東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所 『沿海州クラスキノ渤海城 (2009年度 1~2) 韓・ロ共同発掘報告書』 (東北亜歴史財団、2010年)。
12. 동북아역사재단 『고대 환동해 교류사-2 부 발해와 일본』 (동북아역사재단, 2010년) .
東北亜歴史財団 『古代環東海交流史 2部 渤海と日本』 (東北亜歴史財団、2010年)。
13. 동북아역사재단; 러시아과학원 극동분소 역사고고민속학연구소 『연해주 크라스키노 발해성 (2010년도) 한·러 공동 발굴보고서』 (동북아역사재단, 2011년) .
東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所 『沿海州クラスキノ渤海城 (2010年度) 韓・ロ共同発掘報告書』 (東北亜歴史財団、2011年)。
14. 동북아역사재단 『부거리 일대의 발해유적』 (동북아역사재단, 2011년) .
東北亜歴史財団 『富居里一帶の渤海遺跡』 (東北亜歴史財団、2011年)。
15. 동북아역사재단; 러시아과학원 극동분소 역사고고민속학연구소 『연해주 크라스키노 발해성 (2011년도) 한·러 공동 발굴보고서』 (동북아역사재단, 2012년) .

- 東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所『沿海州クラスキノ渤海城（2011年度）韓・ロ共同発掘報告書』（東北亜歴史財団、2012年）。
16. 『러시아연해주발해유적(제1차한·러공동발굴조사보고서)』（대륙연구소,1994년）.
『沿海州渤海遺蹟(第1次韓・ロ共同発掘調査報告書)』（大陸研究所出版部、1994年）。
 17. 방학봉『발해불교연구』（연변대학출판사,1998년）.
方学鳳『渤海仏教研究』（延辺大学出版社、1998年）。
 18. 방학봉『발해경제연구』（흑룡강조선민족출판사,2001년）.
方学鳳『渤海經濟研究』（黒龍江朝鮮人民出版社、2001年）。
 19. 방학봉『발해주요유적을 찾아서』（연변대학출판사,2003년）.
方学鳳『渤海主要遺跡考察散記』（延辺大学出版社、2003年）。
 20. 방학봉『발해의 주요교통로 연구』（연변인민출판사,2003년）.
方学鳳『渤海主要交通路研究』（延辺人民出版社、2003年）。
 21. 사회과학원 력사연구소『발해 및 후기 신라사(조선전사 5,중세편)』（과학백과사전종합출판사,1979년）.
朝鮮社会科学院歴史研究所『渤海及び後期新羅史(朝鮮全史 5、中世篇)』（科学百科事典総合出版社、1979年）。
 22. 사회과학원 고고학연구소『발해의 무덤(조선고고학전서 42 중세편 19)』（진인진, 2009년）.
朝鮮社会科学院考古学研究所『渤海の墳墓(朝鮮考古学全書 42 中世編 19)』（ジニンジン、2009年）。
 23. 宋基豪『渤海 政治史 研究』（一潮閣, 1995년）.
宋基豪『渤海政治史研究』（一潮閣、1995年）。
 24. 송기호『발해 사회문화사 연구』（서울대학교출판문화원,2011년）.
宋基豪『渤海社会文化史研究』（ソウル大学校出版文化院、2011年）。
 25. 유득공 지음;송기호 옮김『발해고』홍익출판사,2000년）.
柳得恭著、宋基豪訳『渤海考』（弘益出版社、2000年）。
 26. 임상선『발해사의 이해』（신서원, 1991년）.
林相先『渤海史の理解』（新書苑、1991年）。
 27. 임상선『발해의 지배세력 연구』（신서원, 1999년）.
林相先『渤海の支配勢力研究』（新書苑、1999年）。
 28. 임상선『발해사 바로읽기 발해사 쟁점과 연구』（동재, 2008년）.
林相先『渤海史の正しい読み 渤海史争点と研究』（トンジェ、2008年）。
 29. 장재진 외『발해 대외관계사 자료 연구』（동북아역사재단,2011년）.
張在進など『渤海対外関係史資料研究』（東北亜歴史財団、2011年）。
 30. 정석배;Yu.G.니끼친『연해주 체르냐찌노 5 발해고분군(I)(제1·2차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』（한국전통문화학교 문화유적과,러시아연방 극동국립기술대학교,2005년）.
鄭昔培、Yu.G.ニキチン『(沿海州) チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (I) :第1・2次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、2005年）。
 31. 정석배;Yu.G.니끼친『연해주 체르냐찌노 5 발해고분군(II)(제3차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』（한국전통문화학교 문화유적과,러시아연방

- 극동국립기술대학교,2006년) .
- 鄭昔培、Yu.G.ニキチン『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(Ⅱ) (第3次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国傳統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2006年)。
32. 정석배;Yu. G.니끼친;Ya. E.삐스카레바.『연해주 체르냐찌노 5 발해고분군(Ⅲ) (제4차 한·러공동연해주발해문화유적발굴조사)』(한국전통문화학교문화유적과,러시아연방 극동국립기술대학교, 러시아과학원 극동지소 역사학고고학민족학연구소, 2007년) .
- 鄭昔培、Yu.G.ニキチン、Y a. E.비스카레바『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(Ⅲ) (第4次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国傳統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2007年)。
33. 정석배, Yu. G.니끼친[외]『연해주 체르냐찌노 5 발해고분군(Ⅳ) (제6차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』(한국전통문화학교 문화유적과,러시아연방 극동국립기술대학교, 러시아과학원 극동지소 역사학고고학민족학연구소, 2009년) .
- 鄭昔培、Yu.G.ニキチンなど『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(Ⅳ) (第6次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国傳統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009年)。
34. 정석배, Yu. G.니끼친[외]『연해주 체르냐찌노 2 옥저·발해 주거유적(Ⅰ) (제5차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』(한국전통문화학교 문화유적과,러시아연방 극동국립기술대학교, 러시아과학원 극동지소 역사학고고학민족학연구소,2008년) .
- 鄭昔培、Yu.G.ニキチンなど『沿海州チェルニャチノ 2 沃沮·渤海住居遺跡(Ⅰ) (第5次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国傳統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2008年)。
35. 정석배, Yu. G.니끼친[외]『연해주 체르냐찌노 2 옥저·발해 주거유적(Ⅱ) (제6차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』(한국전통문화학교 문화유적과,러시아연방 극동국립기술대학교, 러시아과학원 극동지소 역사학고고학민족학연구소, 2009년) .
- 鄭昔培、Yu.G.ニキチンなど『沿海州チェルニャチノ 5 沃沮·渤海住居遺跡(Ⅱ) (第6次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国傳統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009年)。
36. 정영진,윤현철,이동휘『고분으로 본 발해 문화의 성격』(동북아역사재단,2006년) .
- 鄭永振、尹玄哲、李東輝『古墳でみた渤海文化の性格』(東北亜歴史財団、2006年)。
37. 조선유적유물도감 편찬위원회『발해의 유적과 유물』(서울대학교 출판부,2002년) .
- 『朝鮮遺跡遺物図鑑』編纂委員会『渤海の遺跡と遺物』(ソウル大学校出版部、2002年)。
38. 조중공동고고학발굴대『중국동북지방의유적발굴보고』(사회과학원출판사,1966년) .
- 朝中共同考古学發掘隊『中国東北地方の遺跡發掘報告(1963~1965)』(社会科学院出版社、1966年)。
39. 崔茂藏 譯『高句麗·渤海文化:中國 考古學者의 發掘報告書』(集文堂,1985년) .
- 崔茂藏訳『高句麗·渤海文化:中国考古學者の發掘報告書』(集文堂、1985年)。

40. 한규철 『발해의 대외관계사:남북국의 형성과 전개』 (신서원, 2005년) .
韓圭哲 『渤海の對外關係史』 (新書苑, 1994年)。
41. 한규철[외] 『발해 5경과 영역 변천』 (동북아역사재단, 2007년) .
韓圭哲など 『渤海 5京と領域変遷』 (東北亜歴史財団, 2007年)。

[論文]

【中国語論文】(筆画順)

1. E·И·傑烈維揚科著、林樹山、姚風訳『黒龍江沿岸の部落』(吉林文史出版社、1987年)。
2. 干志耿『黒龍江古代民族史綱』(黒龍江人民出版社 1987年)。
3. 于匯歴「黒龍江海林二道河子渤海墓葬」(『北方文物』1987年第1期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
4. 王成国「唐代渤海国姓氏研究」(『北方論叢』192、2005年第4期)。
5. 王承礼「敦化六頂山渤海古墓群調査簡記」(『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年、初出『吉林省文物工作通訊』1957年)。
6. 王承礼、曹正榕「吉林敦化六頂山渤海古墓」(『考古』1961年第6期)。
7. 王承礼「敦化六頂山渤海墓清理發掘記」(『社会科学戰線』1979年第3期)。
8. 王承礼「記唐代渤海国咸和十一年中台省致日本太政官牒」(『北方文物』1988年第3期)。
9. 王樂「中国境内渤海陶器研究」(2009年吉林大学博士学位論文)。
10. 王志剛「六頂山渤海墓葬研究」(2008年吉林大学碩士學位論文)。
11. 王志剛「渤海の墓葬類型研究」(『中国考古学会第十二次年会論文集』文物出版社、2010年)。
12. 王培新「靺鞨—女真係銅帶飾及相關問題一」(『北方文物』1997年第2期)。
13. 中国社会科学院考古研究所「六頂山渤海貴族墓地」(『六頂山与渤海鎮』中国大百科全書出版社、1997年)。
14. 吉林市博物館「吉林永吉楊屯大海猛遺址」(『考古学集刊』第5輯、1987年)。
15. 吉林省文物工作隊、吉林市博物館、永吉県文化局「吉林永吉楊屯遺址第三次發掘」(『考古学集刊』第7輯、1991年)。
16. 吉林省文物考古研究所「吉林永吉查里巴靺鞨墓地」(『文物』1995年第9期)。
17. 吉林省文物考古研究所、吉林大学边疆考古研究中心「吉林琿春市八連城内城建築基址的發掘」(『考古』2009年第6期)。
18. 吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文物管理委員会辦公室「吉林和龍市竜海渤海王室墓葬發掘簡報」(『考古』2009年第6期)。
19. 吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文物管理委員会辦公室「吉林和龍市竜海渤海王室墓葬發掘簡報」(『考古』2009年第6期)。
20. 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所「吉林敦化市六頂山墓群 2004年發掘簡報」(『考古』2009年第6期)。
21. 吉林省文物工作隊、吉林市博物館、永吉県文化局「吉林永吉楊屯遺址第三次發掘」(『考古学集刊』第7輯、1991年)。
22. 佟柱臣「『渤海記』著者張建章『墓志』考」(『黒龍江文物叢刊』1981年第6期)。

23. 延邊朝鮮族自治州博物館「渤海貞孝公主墓發掘清理簡報」(『社会科学戰線』1982年第1期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年)。
24. 延邊朝鮮族自治州博物館・和龍縣文化館「和龍北大渤海墓清理簡報」(『東北歷史与考古』1982年第1期)。
25. 林棟「靺鞨文化陶器的区系探索」(2008年吉林大學碩士學位論文)。
26. 宋玉彬「渤海都城故址研究」(『考古』2009年第6期)。
27. 李殿福「從考古學上看唐代渤海文化」(『學習与探索』1984年4期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
28. 李蜀蕾「渤海墓葬類型演變再探討」(『北方文物』2005年第1期)。
29. 金太順「渤海墓葬研究中的幾箇問題」(『考古』1997年第2期)。
30. 金銀玉「寧安虹鱒魚場渤海墓葬研究」(2011年吉林大學碩士論文)。
31. 孫仁傑「高句麗積石墓葬具研究」(『高句麗研究文集』延邊大學出版社、1993年)。
32. 孫秀仁「略論海林山嘴子渤海墓葬的形制、傳統和文物特徵」(『中國考古學會第一屆年會論文集(1979)』1980年、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
33. 孫秉根「渤海墓葬的類型与分期」(『漢唐与边疆考古研究』1994年、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
34. 孫進己「渤海民族的形成發展過程」(『東北民族史研究1』中州古籍出版社、1994年)。
35. 黑龍江省文物考古研究所「黑龍江海林北站渤海墓試掘」(『北方文物』1987年第1期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
36. 黑龍江省文物考古研究所「黑龍江省牡丹江樺林石場溝墓地」(『北方文物』1991年第4期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
37. 黑龍江省文物考古研究所「黑龍江寧安虹鱒魚場墓地的發掘」(『考古』1997年第2期)。
38. 胡秀然・劉曉東「渤海陶器類型學傳承淵源的初步探索」(『北方文物』2001年第4期)。
39. 張玉霞「牡丹江流域渤海遺跡出土陶器的類型學研究」(『边疆考古研究』第4輯、2005年)。
40. 張泰湘「唐代率賓府辨」(『歷史地理』第2輯、1982年)。
41. 喬梁「靺鞨陶器分期初探」(『北方文物』1994年第2期)。
42. 鄭永振「渤海墓葬研究」(『黑龍江文物叢刊』1984年第2期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
43. 劉曉東「渤海墓葬的類型与演變」(『北方文物』1996年第2期)。
44. 劉曉東「渤海記年再考訂」(『歷史研究』1996年第4期)。
45. 劉曉東「渤海“振国”，“震国”名源考察」(『北方文物』2007年第11期)。
46. 劉曉東「靺鞨文化研究」(2007年吉林大學碩士學位論文)。
47. 劉曉東「靺鞨文化遺存淺析」(『北方文物』2009年第4期)。
48. 劉曉東「東北地区の靺鞨文化」(『能登臣馬身と肅慎の遭遇—1350年紀年国際シンポジウム—肅慎の謎を探る(環日本海世界の古代史)』金沢学院大學美術文化学部文化財学科、2010年)。
49. 嚴長綠・朴龍淵「北大渤海墓葬研究」(『渤海史研究』2、延邊大學出版社、1991年)。
50. 嚴聖欽「渤海国是我国少数民族建立的一个地方政權」(『社会科学輯刊』1981年2期、『高句麗渤海研究論文集成』4、哈爾濱出版社、1997年)。
51. 馮恩學「黑水靺鞨的裝飾品及淵源」(『華夏考古』2011年第1期)。
52. 楊軍「渤海“土人”新解」(『渤海国民族構成与分布研究』吉林人民出版社、2007年)。
53. 綦中明「唐代渤海人名及其文化內涵」(『北方文物』2012年第2期)。

54. 閻万章「渤海“貞惠公主墓碑”的研究」(『考古学報』1956年第2期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
55. 韓東育「東亜研究的問題点与新思考」(『社会科学戦線』2011年第3期)。
56. 魏存成「渤海王室貴族墓葬」(『中国考古学第三次年会論文集』1981年、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
57. 魏存成「牡丹江上游敦化六頂山墓葬」(『渤海考古』文物出版社、2008年)。
58. 魏存成「契爾良基諾5号墓地」(『渤海考古』文物出版社、2008年)。
59. 譚英傑など「渤海墓葬中出土几种主要陶器類型的演变」(『黒龍江区域考古学』中国社会科学出版社、1991年)。

【日本語論文】(五十音順)

1. A.L. イヴリエフ、V.I. ボルディン、Yu.G.ニキーチン著;清水信行訳「渤海の青銅髪飾り」(『青山史学』25、2007年)。
2. E・I・ゲルマン「渤海の陶器と磁器」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
3. E・I・ゲルマン「ロシア沿海州中世遺跡出土の施釉陶器と磁器」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
4. V・I・ボルディン「沿海地方における渤海遺跡の編年問題に関して」(『北方ユーラシア学会会報』2、1993年12月)。
5. Yu.G. ニキーチン、チョンソクベ著、清水信行訳「2003～2004年スイフン河流域のチェルニャチノ5号墓地遺跡調査の成果」(『青山考古』23、2006年11月)。
6. 赤羽目匡由「封敖作『與渤海王大彝震書』について—その起草・発給年時と渤海後期の権力構成—」(『東洋学報』85(3)、東洋文庫、2003年12月)。
7. 赤羽目匡由「新羅末高麗初における東北境外の黒水・鉄勒・達姑の諸族—渤海・新羅との関係において—」(『朝鮮学報』197、2005年10月)。
8. 赤羽目匡由「八～九世紀における渤海の中央権力と地方社会—種族支配と自国認識—」(2009年度東京都立大学博士論文)。
9. 赤羽目匡由「唐代越喜靺鞨の住地とその移動」(『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011年)。
10. 赤羽目匡由「八世紀における渤海の高句麗継承意識を巡って」(『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011年)。
11. 東潮「高句麗における横穴式石室墳の出現と展開」(『高句麗考古学研究』吉川弘文館、1998年)。
12. 東潮「渤海墓制と領域」(『朝鮮学報』176・177、2000年10月)。
13. 足立拓朗「渤海前期の『靺鞨系土器』について」(『青山考古』17、2000年)。
14. 天野哲也「オホーツク文化期北海道島にもたらされた帯飾板の背景」(『北方史の新視座』、雄山閣、1994年)。
15. 天野哲也「『靺鞨』社会の特徴—コルサコフ墓地の帯飾板を中心に—」(『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、1995年)。
16. アレキサンダー・イヴリエフ「ロシアにおける渤海史研究」(『Journal of Northeast Asian History』(4・2)、2007年)。

17. 石井正敏「神亀四年、渤海の日本通交開始とその事情」(『日本渤海関係史研究』吉川弘文館、2001年。初出1975年)。
18. 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討—」(『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、初出1996年)。
19. 石井正敏「渤海の西方社会との接触」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
20. 石井正敏「渤海と日本の交渉」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
21. 石井正敏「『続日本紀』養老四年条の『靺鞨国』—『靺鞨国』=渤海説の検討—」(『アジア遊学』3、1999年)。
22. 伊藤玄三「新羅・渤海の鍔帯金具について」(『法政史学』40、1988年3月)。
23. 石見清裕「蕃望について」(『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、1998年)。
24. 臼杵勲「靺鞨文化の年代と地域性」(『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』雄山閣、1994年)。
25. 臼杵勲「靺鞨・女真系帯金具について」(『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版、2000年)。
26. 臼杵勲「靺鞨社会の形成—後期鉄器時代」『鉄器時代の東北アジア』同成社、2004年)。
27. 臼杵勲「六頂山墳墓群」(『鉄器時代の東北アジア』同成社、2004年)。
28. 梅村喬「古代百姓観の展開」(『愛知県立大学文学部論集(一般教育編)』33、1983年)。
29. 延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「和龍北大渤海墓群清理簡報」(『東北歴史与考古』1982年第1期)。
30. 王承礼著・古畑徹訳「唐代渤海『貞恵公主墓志』と『貞孝公主墓志』の比較研究」(『朝鮮学報』103、1982年)。
31. 王培新「中国における渤海都城と交通路の研究」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
32. 王勇「渤海商人李光玄について」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
33. 大隈晃弘「渤海の首領制」(『新潟史学』17、1984年)。
34. 大貫静夫「同仁文化系統の土器の編年」(『東北アジアの考古学』同成社、1998年)。
35. 加地伸行「『孝経正義』三卷」(『孝経』(全訳注)講談社、2007年)。
36. 金子修一「中国から見た渤海国」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
37. 亀井明德「渤海三彩陶試探」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
38. 河上洋「渤海の地方統治体制」(『東洋史研究』42-2、1983年)。
39. 菊池俊彦「書評 E・II・デレヴァーンコ著『黒龍江中流の靺鞨の遺跡』」(『史學雑誌』86(2)、1977年2月)。
40. 菊池俊彦「靺鞨の同仁文化」(『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会、1995年)。
41. 木山克彦「渤海土器の編年と地域差について」(『北方圏の考古学』I、2007年4月)。
42. 木山克彦「渤海土器の展開と周辺地域」(『考古学ジャーナル』605、2010年)。
43. 木山克彦「靺鞨・渤海・女真の考古学」(『アジア遊学(アイヌ史を問いなおす—生態・交流・文化継承—)』139、2011年3月)。
44. 木山克彦「ロシア沿海地方の渤海土器」(『海と考古学』第8号、2012年)。

45. 姜成山「渤海墳墓研究試論—虹鱒魚場墳墓群の検討を中心に—」(『国際学研究』創刊号、2011年)。
46. 姜成山「『類聚国史』渤海沿革記事の首領について」(『国際学研究』第3号、2013年)。
47. 姜成山「渤海率賓府の一地方社会について」(『社会文化史学』第56号、2013年)。
48. 喬梁「靺鞨陶器の地域区分・時期区分および相関する問題の研究」(『北東アジア交流史研究—古代と中世—』塙書房、2007年)。
49. 金宗赫著、裴元柱訳「青海土城とその周辺の渤海遺跡」(『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣、1993年)。
50. 小嶋芳孝「高句麗・渤海との交流」(『日本海と北国文化』(『海と列島文化』第一巻)、小学館、1990年)。
51. 小嶋芳孝「中国東北地方の渤海土器について—大川遺跡出土の黒色壺を考える—」(『1993年度大川遺跡発掘調査概報—余市川改修業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要V—』、1994年)。
52. 小嶋芳孝「蝦夷とユーラシア大陸の交流」(『古代蝦夷の世界と交流(古代王権と交流1)』、名著出版、1996年)。
53. 小嶋芳孝「環日本海交流史から見た靺鞨・渤海との交流」(『史学雑誌』105(12)、1996年)。
54. 小嶋芳孝「渤海の芸術」(『月刊しにか(特集：渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
55. 小嶋芳孝「渤海の産業と物流」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
56. 小嶋芳孝「渤海考古学の現状と課題—渤海都城の変遷と水系を考える—」(『東アジアの古代文化』96、1998年)。
57. 小嶋芳孝「渤海の仏教遺跡」(『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年)。
58. 小嶋芳孝「渤海と日本列島の交流経路」(『歴史と地理』577、2004年)。
59. 小嶋芳孝「環日本海交流史の諸相」(『北東アジア交流史研究—古代と中世—』塙書房、2007年)。
60. 小嶋芳孝「渤海の遺跡」(『アジア遊学』107、2008年2月)。
61. 小嶋芳孝「六頂山墓群」(『アジア遊学』107、2008年)。
62. 小嶋芳孝「西古城」(『アジア遊学』107、2008年)。
63. 小嶋芳孝「八連城」(『アジア遊学』107、2008年)。
64. 小嶋芳孝「上京」(『アジア遊学』107、2008年)。
65. 小嶋芳孝「古代日本の境界領域と能登」(『古代日本の異文化交流』勉誠出版、2008年)。
66. 小嶋芳孝「渤海平地城の検討」(『扶桑：田村晃一先生喜寿記念論文集』、青山考古学会田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会、2009年)。
67. 小嶋芳孝「渤海から見た北東北のシャーマニズムと仏教」(『古代末期の境界世界—城久遺跡群と石江遺跡群を中心として—』法政大学国際日本学研究所、2010年)。
68. 小嶋芳孝、Boldin V.、Ivliev A.など「ロシア沿海地方における渤海遺跡調査(2010年)」(『金沢学院大学紀要(文学・美術・社会学編)』9、2011年)。
69. 酒寄雅志「渤海中台省牒の基礎的研究」(『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、初出1985年)。
70. 酒寄雅志「渤海中台省牒の位署について」(『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、初出1985年)。

71. 酒寄雅志「東北アジアのなかの渤海と日本」(『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、初出1991)。
72. 酒寄雅志「日本と渤海・靺鞨との交流—日本・オホーツク海域圏と船—」(『渤海と古代の日本』校倉書房2001年、初出1997年)。
73. 酒寄雅志「渤海国文化点描」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
74. 酒寄雅志「渤海王権と新羅・黒水靺鞨・日本との関係」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
75. 酒寄雅志「渤海史研究と近代日本」(『渤海と古代の日本』校倉書房2001年、初出1999年)。
76. 酒寄雅志「『唐碑亭』、すなわち『鴻廬井の碑』をめぐって」(『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、初出1999年)。
77. 酒寄雅志「渤海の遣唐使」(『専修大学東アジア世界史研究センター年報』4、2010年3月)。
78. 桜井俊郎「渤海の有力姓氏と中央官制」(『歴史研究』33、1995年3月)。
79. 清水信行「チェルニャチノ5墓地遺跡」(『アジア遊学』107、2008年)。
80. 清水信行「クラスキノ土城の発見と調査」(『アジア遊学』107、2008年)。
81. 末松保和「日韓関係」(『岩波講座日本歴史(第四回配本)』1933年、『日本上代史管見』私家版、1963年所収)。
82. 鈴木靖民「日本律令制の成立・展開と対外関係」(『歴史学研究』1974年度大会別冊特集「世界史における民族と民主主義」)。
83. 鈴木靖民「渤海の首領に関する基礎的研究」(『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年、初出1979年)。
84. 鈴木靖民「渤海の首領制—渤海の社会と地方支配—」(『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、初出1985年)。
85. 鈴木靖民「渤海の国家構造」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
86. 鈴木靖民「渤海の遠距離交易と荷担者」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
87. 鈴木靖民「渤海国家の構造と特質—首領・生産・交易—」(『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、初出1999年)。
88. 宋基豪著、清水信行訳「六頂山古墳群の性格と渤海建国集団」(『青山考古』24、2008年)。
89. 外山軍治「洪皓と松漠紀聞」(『愛泉女子短期大学紀要』12-13号、1978年3月)。
90. 瀧川政次郎「日・渤官制の比較」(『建国大学研究期報』1、1941年)。
91. 田島公「海外との交渉」(『古文書の語る日本史』二、筑摩書房、1991年)。
92. 田村晃一「北東アジア考古学における渤海の位置づけ」(『環日本海論叢』8、1995年)。
93. 田村晃一「渤海の遺跡が語るもの」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
94. 田村晃一「渤海の土城・山城・寺院」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
95. 田村晃一「古代国家渤海と日本の交流に関する考古学的調査」1996年度～1998年度科学研究費補助金(海外学術調査)研究成果報告書、1999年3月)。

96. 田村晃一、山口正憲、四角隆二、張替清司、松葉崇「2001年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」『青山史学』20、2002年。
97. 田村晃一「貞恵公主墓と貞孝公主墓の意味するもの（渤海の王陵・貴族墓とその被葬者（その1）」（『青山考古』27、2011年3月）。
98. 中澤寛将「土器生産とその組織化—渤海から女真への展開プロセス—」（『アジア遊学』107、2008年）。
99. 中澤寛将「渤海の食器様式と土器生産」（『古代』123、2010年3月）。
100. 中澤寛将「考古学からみた渤海の地域社会」（『情報の歴史学』、2011年）。
101. 中澤寛将「六頂山墳墓群」（『北東アジア中世考古学の研究—靺鞨・渤海・女真—』六一書房、2012年）。
102. 中村亜希子「渤海の瓦」（『古代』129・130、2012年9月）。
103. 中村裕一「渤海国咸和十一年中台省牒に就いて—古代東アジア国際文書の一形式—」（唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、1979年8月）。
104. 新妻利久「国書と使節」（『渤海国史及び日本との国交史の研究』東京電機大学出版局、1969年）。
105. 西川宏「渤海考古学の成果と民族問題」（『山陰考古学の諸問題』1986年）。
106. 西嶋定生「6～8世紀の東アジア」（『岩波講座日本歴史』2、岩波書店、1962年）。
107. 河創国「朝鮮の渤海遺跡」（『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年）。
108. 濱田耕策「渤海史をめぐる朝鮮史学界の動向—共和国と韓国の『南北朝時代』論について—」（『朝鮮学報』86、1978年1月）。
109. 濱田耕策「唐朝における渤海と新羅の争長事件」（『古代東アジア史論集（下巻）』吉川弘文館1978年3月）。
110. 濱田耕策「留唐学僧戒融の日本帰国をめぐる渤海と新羅」（『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、1995年）。
111. 濱田耕策「渤海国王位の継承と『副王』」（『年報朝鮮學』7、1999年）。
112. 濱田耕策「渤海国の京府州郡縣の整備と首領の動向—新羅との比較を中心として—」（『白山学報』52、1999年3月）。
113. 濱田耕策「渤海国の遣日本使—その時期区分と特質—」（『慶北史学』23、2000年）。
114. 濱田耕策「日本における渤海認識の変遷」（『Journal of Northeast Asian History』(4-2)、2007年）。
115. 濱田耕策「日本の渤海史認識」（『渤海の歴史と文化』校倉書房、2009年）。
116. 日野開三郎「靺鞨七部の前身とその属種」（『日野開三郎東洋史学論集』15、三一書房、1991年）。
117. 藤沢一夫「火葬墳墓の流布」（『考古学講座』6、雄山閣、1970年）。
118. 古畑徹「渤海建国関係記事の再検討—中国側史料の基礎的研究—」（『朝鮮学報』113、1984年）。
119. 古畑徹「大門芸の亡命年時について—唐渤海紛争に至る渤海の情勢—」（『集刊東洋学』51、1984年5月）。
120. 古畑徹「日渤海交渉開始期の東アジアの情勢—渤海対日通交開始要因の再検討—」（『朝鮮史研究会論文集』23、1986年）。
121. 古畑徹「張九齡作『勅渤海王大武芸書』第1首の作成年時について—『大門芸の亡命年時について』補遺—」（『集刊東洋学』59、1988年5月）。

- 122.古畑徹「張九齡作『勅渤海王大武芸書』と唐渤紛争の終結—第二・三・四首の作成年時を中心として—」(『東北大学東洋史論集』3、1988年1月)。
- 123.古畑徹「渤海・日本間航路の諸問題—渤海から日本への航路を中心に—」(『古代文化』46(8)、1994年)。
- 124.古畑徹「渤海使の文化使節的側面の再検討—渤海後期の中華意識・対日意識と関連させて—」(『東北大学東洋史論集』6、1995年)。
- 125.古畑徹「後期新羅・渤海の統合意識と境域観」(『朝鮮史研究会論文集』36、朝鮮史研究会、1998年)。
- 126.古畑徹「『唐会要』の流伝に関する一考察」(『東洋史研究』57(1)、1998年)。
- 127.古畑徹「『唐会要』の鞞鞫・渤海の項目について」(『朝鮮文化研究』8、2001年)。
- 128.古畑徹「環日本海諸国の歴史認識の共有化を阻害する要因—渤海国認識をめぐる民族問題を中心として—」(『グローバリゼーションのもとでの異文化理解の可能性と条件:総合研究』金沢大学日本海域研究所、2002年)。
- 129.古畑徹「戦後日本における渤海史の歴史枠組みに関する史学史的考察」(『東北大学東洋史論集』9、2003年)。
- 130.古畑徹「渤海の首領研究の方法をめぐって—解明のための予備的考察—」(『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年)。
- 131.古畑徹「渤海と日本」(『古代を考える 日本と朝鮮』吉川弘文館、2005年)。
- 132.古畑徹「唐代『首領』語義考—中国正史の用例を中心に—」(『東洋史論集』11、2007年3月)。
- 133.古畑徹「渤海王大欽茂の『国王』進爵と第六次渤海使—渤海使王新福による安史の乱情報の検討を中心に—」(『集刊東洋学』100、2008年)。
- 134.古畑徹「日本の渤海史研究について」(『日本学』28、2008年)。
- 135.古畑徹「歴史の争奪—中韓高句麗歴史論争を例に—」(『メトロポリタン史学』6、2010年)。
- 136.朴時亨「渤海史研究のために」(『渤海文化』雄山閣、1979年)。
- 137.堀井佳代子「対渤海外交における太政官牒の成立—中台省牒との相違から—」(『日本歴史』744、2010年5月)。
- 138.馬一虹「渤海と唐の関係」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
- 139.馬淵貞利「朝鮮史における民族と国家」(『朝鮮史研究会論文集』25、1988年3月)。
- 140.三上次男「渤海の瓦」(『高句麗と渤海』吉川弘文館、1990年、初出1947年)。
- 141.三上次男「朝鮮との関係」(『平安時代(上)(図説日本文化史大系)』小学館、1958年)。
- 142.森田悌「渤海の首領について」(『弘前大学国史研究』94、1993年)。
- 143.森田悌「渤海首領考」(『延喜式研究』15、1998年)。
- 144.森安孝夫「渤海から契丹へ—征服王朝の成立—」(『東アジア世界における日本古代史講座』7、学生社、1982年)。
- 145.李成市「渤海史研究における国家と民族—『南北朝時代』論の検討を中心に—」(『朝鮮学報』25、1988年3月)。
- 146.李成市「渤海の対日本外交への理路」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年)。
- 147.李成市「穢族の生業と民族」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年)。
- 148.李美子「渤海国の社会経済—史料の検討を中心として—」(『年報朝鮮学』7、1999年9月)。

- 149.李美子「渤海の遼東地域の領有問題をめぐって—拂涅・越喜・鉄利等靺鞨の故地と関連して—」(『史淵』140、2003年)。
- 150.李美子「渤海国史の基礎的研究」(2004年九州大学博士請求論文)。
- 151.和田清「渤海国地理考」(『東洋学報』36・4、1954年3月)。

【韓国語論文】(ハングル音順、日本語は筆者)

1. E.V. 아스타첸코바, 정석배「발해주민의 표현 및 장식-응용미술 : 연해주 유적 발굴조사 자료를 통해」(『高句麗渤海研究』42,2012년 3월) .
E.V.アスタシエンコヴァ著、鄭昔培訳「渤海住民の表現および装飾—応用美術 : 沿海州遺跡発掘調査資料を通じて—」(『高句麗渤海研究』42、2012年3月)。
2. 강성봉「발해수령과 고려 도령의 상관성검토」(『고구려발해연구』42、2012년 3월) .
姜成奉「渤海首領と高麗都領の相関性検討」(『高句麗渤海研究』42、2012年3月)。
3. 권오중「靺鞨의 種族系統에 관한 試論」(『진단학보』49,1980년 6월) .
權五重「靺鞨の種族系統に関する試論」(『震旦学報』49、1980年6月)。
4. 권은주「渤海 前期 北方民族 關係史」(2012년경북대학교 대학원 사학과박사학위논문) .
權恩珠『渤海前期北方民族關係史』(2012年慶北大学校大学院博士学位論文)。
5. 김동우「발해 수령의 개념과 실상」(『동원학술논문집』7、2005년 12월) .
金東宇「渤海首領の概念と実像」(『東垣學術論文集』7、2005年12月)。
6. 김동우『발해의 지방통치체제와 首領』(『한국사학보』1,1996년) .
金東宇「渤海の地方統治体制と首領」(『韓國史學報』1、1996年)。
7. 김동우『渤海 地方 統治 體制 研究 : 渤海受領을 中心으로』(2006년 고려대학교 대학원 사학과 박사학위논문) .
金東宇『渤海地方統治制度研究—渤海受領を中心に—』(2006年高麗大学校大学院史学科博士学位論文)。
8. 金鐘福「8세기 발해와 말갈제부의 대당교섭에 대한 기초적검토—冊府元龜 朝貢·褒異條를 중심으로」(『역사문화연구』39,2011년) .
金鐘福「8世紀渤海と靺鞨諸部の対唐交渉に対する基礎的検討—冊府元龜 朝貢·褒異條を中心に」(『歴史文化研究』39、2011年)。
9. 金鐘圓「발해의 首領에 대하여—地方統治制度和 관련하여—」(『발해사연구논선집』백산문화,1989년) .
金鐘圓「渤海の首領について—地方統治制度と関連して—」(『渤海史研究論選集』白山文化、1989年)。
10. 김진광「石室墓造營을 통해 본渤海의 北方經營」(『高句麗渤海研究』30,2008년 3월) .
金鎮光「石室墓造營を通じてみた渤海の北方經營」(『高句麗渤海研究』30輯、2008年3月)。
11. 김진광「홍준어장고분군의 사회적 지위 및 성격 : 고분의 유형과 분포상황을 중심으로」(『高句麗渤海研究』42、2012년 3월) .
金鎮光「虹鱒魚場古墳群の社会的地位及び性格—古墳の類型と分布狀況を中心に—」(『高句麗渤海研究』第42輯、2012年3月)。
12. 金鎮光『발해문왕대의 지배체제연구』(2007년韓國學中央研究院韓國學大學院人類學專攻박사학위논문) .

- 金鎮光『渤海文王代の支配体制研究』(韓國學中央研究院韓國學大學院人類學專攻 2007 年博士學位論文)。
13. 박규진 「발해석실분의 형식과 구조에 대한 연구」 (『고구려발해연구』 39, 2011년 3월) .
朴紉鎭 「渤海石室墳の形式と構造に関する研究」(『高句麗渤海研究』 39 輯、2011 年 3 月)。
 14. 박윤무 「발해석실분에 관한 연구」 (『발해사연구』 2, 서울대학출판부, 1994년) .
朴潤武 「渤海石室封土墓に関する考察」(『渤海史研究』 2、ソウル大学出版部、1994 年)。
 15. 박진숙 「발해의 대일본외교연구」 (2001년 충남대학교 대학원 국사학과 박사논문) .
朴真淑 「渤海の対日本外交研究」(忠南大学校大学院国史学科、2001 年博士論文)。
 16. 박진숙 「발해의 지방편성과 영역」 (『발해 5 경과 영역변천』 동북아역사재단, 2007년) .
朴真淑 「渤海の地方編成と領域」(『渤海 5 京と領域変遷』 東北亜歴史財団、2007 年)。
 17. 송기호 「발해의 『多人葬』에 대한 연구」 (『韓國史論』 11, 1984년) .
宋基豪 「渤海の「多人葬」についての研究」(『韓國史論』 11、1984 年)。
 18. 宋基豪 「渤海首領의 성격」 (『韓國古代中世의 支配體制와 農民』 知識産業社, 1997년) .
宋基豪 「渤海首領の性格」(『韓國古代中世の支配体制と農民』 知識産業社、1997 年)。
 19. 송기호 「용해구역 고분 발굴에서 드러난 발해국의 성격」 (『고구려발해연구』 38, 2010년 11월, 『발해 사회문화사 연구』 서울대학교출판문화원, 2011년 수록) .
宋基豪 「龍海区域の古墳発掘であらわれた渤海国の性格」(『高句麗渤海研究』 38、2010 年 11 月、『渤海社会文化史研究』ソウル大学出版文化院、2011 年所収)。
 20. 宋基豪 「六頂山 古墳群과 건국집단」 (『汕耘史學』 8, 1998년 12월, 『발해 사회문화사 연구』 서울대학교출판문화원, 2011년 수록) .
宋基豪 「六頂山古墳群と建国集団」(『汕耘史学』 8, 1998 年 12 月、『渤海社会文化史研究』ソウル大学出版文化院、2011 年)。
 21. 유리 니키티 「수이푼 강 연안 체르냐티노 5 발해 武將古墳」 『고조선·고구려·발해 발표 논문집』 고구려연구재단, 2005년) .
Yu.G.ニキチン 「スイフン河流域のチェルニャチノ 5 渤海武將墓」『古朝鮮高句麗渤海發表論文集』高句麗研究財団、2005 年)。
 22. 이남석 「발해묘제」 (『발해의 역사와 문화』 동북아역사재단, 2009년) .
李南奭 「渤海墓制」(『渤海の歴史と文化』 東北亜歴史財団、2009 年)。
 23. 鄭昔培、Yu.G.ニキチン 「체르냐찌노 5 발해고분군의 고분유형과 출토유물」 (『高句麗渤海研究』 26, 2007년 3월) .
鄭昔培、Yu.G.ニキチン 「チェルニャチノ 5 渤海古墳群の古墳類型と出土遺物」(『高句麗研究』 26 輯、2007 年 3 月)。
 24. 정석배 「연해주 체르냐찌노 5 발해고분군」 (『발해 고고학의 최신성과』 서울대학교 박물관해동성국·발해」 특별전 기념 국제학술대회, 2003년) .
鄭昔培 「沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群」(『渤海考古学の最新成果』ソウル大学校博物館海東盛国'渤海'特別展記念國際學術大會、2003 年)。
 25. 정석배 「연해주 중세시대의 최신 연구성과」 (『2011 Asia Archaeology』 국립문화재연구소, 2011년) .
鄭昔培 「沿海州中世時代の最新研究成果」 (『2011 Asia Archaeology』 国立文化財研究所、2011 年) 。
 26. 한규철 「고구려시대의 말갈 연구」 (『부산사학』 14·15 합집, 1988년 12월) .
韓圭哲 「高句麗時代の靺鞨研究」(『釜山史学』 14·15 合集、1988 年 12 月)。